

ミサの背景と流れ

J. ガラルダ, s. j.

1. ミサの背景

分かりにくい結論から言えば、ミサは、新しい契約を体験し、感謝する祭儀である。「契約」という親しみにくい概念は、実は、聖書の一つのキー・ワードである。契約は、約束と条件を含む。「あなたがたをずうっと愛する（約束）。愛し合いなさい（条件）」という神の言葉に人間はアーメン（賛成）と云えば、契約が成立することになる。旧約聖書に三つの主な契約が結ばれた。箱船のノアとの契約。その記念は「虹」である。アブラハムとの契約。その記念は「割礼」である。モーセとの契約。その記念は「安息日」である。しかし、人間はこの契約を破ったので、いよいよ最終的な契約が必要となった。それは、キリストとの新しい永遠の契約である。その記念は、ミサである。

最初のミサは、イエスの「さようならパーティ」とも言える、最後の晩餐に行われた。考えてみれば、仲間や家族の間の最も家庭的な一時は、やはり、皆が「同じ釜から飯を喰って」いるときのことであろう。さて、あの夕食に与かった弟子たちも、ミサの食卓に与かる私たちも、仲良く食べながら、神との一致、人間との一致という体験を味わうわけである。その食べ物は、心の糧となったイエス自身だからである。

ところで、ミサの意味は、ミッション（天職）である。要するに、「神に愛されて、皆で愛し合う」という新契約を体験する私たちは、今度は家庭、仲間、職場に帰って、その体験を、生き方でもって、皆に感じさせるという謙虚なミッションを受けるわけである。つまり人間は、眼に見えない感謝と愛という「心」を、体でも感じて表すために、眼に見える特定の象徴や身振りを考え出した。それは「ミサの形」である。なお、この「形」は逆に、その「心」をより深めることになっている。結局は、「心は形を求める。形は心をすすめる」というわけである。

2. ミサの流れ

— 開 祭 —

入祭の歌— 神に向かって一緒に歌う声の一致は、神と人間との心の一致を感じさせる。

回心の祈り— 自分の罪を認めて、心の清めを願う。実は、ミサの中に許しを願う祈りは多くて、信者が暗い罪悪感を抱く危険があるが、その祈りの狙いは、許して下さる神と人間に感謝の気持ちを起こさせ、自分には人を見下ろしたり裁いたりする資格はないという謙虚な気持ちを起こさせ、自分を傷付けた人を許す気持ちを起こさせることである。

栄光の讃歌— 父なる神の栄光は、兄弟である人間が本当の平和と平等で生きることであり、互いに愛し合うことである。大自然が、存在することだけで絶えず御父に歌っている栄光の讃歌を、人間は、愛に生きることによって、意識的に神に差し上げる。

— 言葉の典礼 —

聖書朗読— 一年サイクルで定められている旧約と新約聖書の箇所を聞いてから、皆が立って、キリスト自身の言葉である福音を聞く。なお、キリストが言いたかった内容を分かりやすく説明し、それを現代の日常生活に当てはめる簡単な説教がある。

信仰の宣言— カトリックの主な信条を信じると宣言し、それを本当に信じたいと願う。

共同祈願— 神に最も愛される全世界の困っている人々のために、皆で折る。

— 感謝の典礼 —

パンとぶどう酒を供える祈り— この祈りは、ユダヤの家族のお父さんが唱えていた食前の祈りなので、弟子と食事したときのイエスも、このままに唱えた言葉だとされている。

初代教会の信者は、家からパンと様々な供え物を持って来ていたそうだが、今日では、参加者の代表がパンとぶどう酒を祭壇まで持って行く。

ぶどう酒に水の二、三滴を入れる形式には二つの意味がある。まず、濃いぶどう酒を薄めるという昔の習慣を表す。また、人間の象徴である水を、やがてキリストになるぶどう酒に混ぜるという形式は、人間の捧げ物の価値が高められることと同時に、救いに対する人間のささやかな協力も意味するわけである。

私たちにはほとんど何もないが、必要な物のすべてを差し上げて、御父に対する愛と信頼感を示す。パンとぶどう酒と共に、自分の不安と悩み、喜びと希望を贈呈し、

その上に下る祝福を願う。

司祭は手を洗う— 司祭は昔、信者が持って来ていた野菜、果物などを手で載いて、それを祭壇の回りに並べたそうである。だからこの時に、心を精神的に清めると同時に、物理的にも汚れた手を洗う必要があった。ミサの後で勿論、その品物は貧しい人に配られたが、今日のミサのこの時点には、食物より便利なお金のカンパが行われる。

— 奉献文 —

エピクレシスと聖変化— 司祭は、共同体の願いを受け入れ、御父に向かって、このパンとぶどう酒の上に聖霊を送って、この捧げ物をキリストにして下さるように祈る（エピクレシス）。したがって、供え物の聖変化を行うのは司祭なのではなく、御父がお使いになる聖霊である。神が聖母マリアの御体内に下した聖霊。

なお「体」は、体を通してコミュニケーションする人間を意味する。「血」は、痛みを感じるまでの愛、死ぬまでの愛を象徴する。また「血」にはもう一つの意味がある。エジプトの奴隷状態からユダヤ人を解放したモーセは、シナイ山のいけにえの血について、「この血は契約の血である」と言ったが、罪がもたらす分裂と疎外状態から人間を解放して下さった、新しいモーセであるキリストは、十字架で流れたご自分の血について、「これは、罪の許しとなる新しい永遠の契約の血である」と言った。その時から、動物をいけにえにする習慣を廃止し、自分自身は最終的ないけにえであると宣言した。

因みに、「罪の許しとなる」という言葉は、先ほどの回心の祈りに対する返事である。

それに、キリストは、ごく普通の食べ物であったパンとぶどう酒となって（日本だったならば、多分御飯と酒かお茶を選んだであろう）、私たちの体の中から、命を与えて下さるという不思議な暖かさを感じさせる形を取って、一緒に残りたいと望んだのである。

最後の晩餐のナレーション— 司祭があ夜のキリストの言葉を繰り返している間に、聖霊は神秘的に、供え物を、死ぬまで愛して下さるキリストに変化するのである。それを深く信じていても、その変化の本質と方法は分からない私たちは、「信仰の神秘」だと宣言するわけである。

死者のための祈り— 亡くなられた愛しい方々に向かって、「長い間ありがとう。これからも導いて下さい。よろしく」と祈る。また神に向かって、「この方に会わせて下さってありがとう。この方の幸せをよろしく」というようなことを願う。

「キリストによって、キリストと共に、キリストの内に。。。」という賛美の祈り— ミサには、ギリシア語の「エウハリスティーア」（感謝）という名前もある。さて、「感

謝」になったパンとぶどう酒を上にするこの時の動作は、要するに、その供え物と共に神聖なものになる植物、動物、つまり大自然全体が、永遠たる神に向かって、感謝しながら進んでいるという眼に見えない事実を表す。

主の祈り— キリスト自身から教わったこの祈りを唱えて、父の愛を信じるわれらは、国々のために、平和、平等、愛に満ちた社会という「神の国」の実現を願うわけである。

平和の挨拶— 聖書の平和（シャロム）は、決して武器や喧嘩の爆発という嫌な音の聞こえない状態だけではない。むしろ、愛に従って生きるときに感じられる自分との調和、人との調和、自然そして神との調和である。また、健康、円満な家庭、真の親友、仕事の実り、成功などの恵みでもある。つまり、心と体の幸せである。その意味で、キリストがもたらして下さったこの平和を望み合って、互いに挨拶するわけである。

神の子羊— 現代人にとっては気持ちの悪い話だが、実は、エジプトに奴隷になっていたユダヤ人は、モーセの命令に従って、すぎこしの晩餐のときに戴いていたいけにえの子羊の血でもって、門の外側を塗った。それで、天罰の伝染病がその門には入らなかったのも、ユダヤ人だけは、「子羊の血」によって救われたわけである。それと同時に、本当の「神の子羊」であるキリストの十字架の血によって、われらが救われるわけである。

確かに、キリストの苦しみとわれらの救いの論理的な繋がりには分かりにくいものだが、しかしその反面、この「神の子羊」が、「なぜ人間が苦しまなければならない」という厳しくて神秘的な問題とは、大いに関連性があると言えよう。

御聖体拝領— イエスの譬え話によく出る「宴会」は、永遠な生命のシンボルである。永遠の宴会は、人間兄弟が父と同じ食卓の回りに座って、「同じ釜から飯を食って」愛し合っているという人間の本来のありさまを意味する象徴である。なお、この宴会を表すミサの食べ物は、皆を神と一緒にして下さる救い主のキリスト自身という「神の子羊」なのである。

信者がキリストを拝領するとき、「アーメン」（すなわち「キリストを受け入れます、キリストに付いて行きます」）と発言するけれども、それをまだ本気で言う程でもないと思って、洗礼を受けていない人は、「キリストを受け入れたい、キリストに付いて行きたい」と心で望みながら、祝福を受けるわけである。

—閉 祭—

閉祭の挨拶— ミサに参加して、この一時にあなたが体験したことは、自分のミッション（天職）である。それを生き方でもって皆に伝えなさいという意味の挨拶である。

これでミサが終わるが、神と人間との一致が深く感じられた人生は、より充実につづく。